

かぜ・インフルエンザ②



インフルエンザウイルスの故郷は中国南部といわれる。この地方では人間とアヒルとブタがひとつの家で仲良く暮らしている村が数多くある。アヒルが水辺でふんをし、その水をブタが飲むと、アヒルのインフルエンザウイルスがブタの鼻に入る。このブタの鼻に人間のウイルス

が入ると、2つのウイルスの間に遺伝子交雑が起こり、新種への変異の可能性が高まる。その結果、新型ウイルスが生まれて人間に感染すれば、あっという間に世界に広がるという図式だ。

「いま心配されているのは、アジアを中心に鳥インフルエンザ(H5N1型)の人への感染が広がっていることです。今年だけで何十人という死者が出ていますが、もし新型に変異したら全世界で億単位の人が死亡するとい

う予測もあります」と、中田クリニックの中田絢一郎院長は注意を呼びかける。

日本政府が昨年11月に策定した新型インフルエンザ対策でも、大流行が起これば最悪の場合64万人が死亡し、1300万~2500万人が医療機関を受診すると推定している。

予防にはワクチンの開発しかないが、新型用ワクチンは新型が発生してウイルスが特定できなければつくれない。早くても半年はか

かるとみられ、それまでは現在の鳥インフルエンザウイルスからつくったワクチンが頼りだ。新型への効果は不明だが、当面の代役として期待をかけるしかない。

「新型は別として、インフルエンザは毎年、種々の型が流行します。現在では流行予測の方法が確立されていて、予防効果の高いワクチンがつくられています。65歳以上の方や小児、妊娠している方などは早めに接種してください」と、中田院長。

軽視しないで予防接種を